

韓国現代文学における大河歴史小説の位相（下）

龍澤 秀樹

- I. はじめに
- II. 女流作家の時代
- III. 大河歴史小説の系譜（以上、本稿〔上〕）
- IV. 『辺境』の世界
- V. 「歴史としての現代」と「現代を遡及させた歴史」
- VI. むすび（以上、本稿〔下〕）

キーワード：李文烈、朴景利、崔明姫、
『辺境』、『土地』、『魂の火』、
朴正熙政権、日帝植民地時代、
両班、李光洙、間島、「満州」、
「民族文学」

IV. 『辺境』の世界

現代史をテーマとする大河小説『辺境』の作

(1) 本稿は＜李文烈文学＞の全体を対象とするものではないから、ここで彼の作品世界の全体を紹介することはしないが、大河小説『辺境』に至る系列のいわば「イデオロギー小説」（その代表作は『英雄時代（上・下）』、民音社、1984年、である）のほかに、（非アジア世界を含む）古代史や原始社会を舞台に宗教意識について語る作品（代表作は、『사람의 아들（人間の息子）』、民音社、1979年、である。本格的な作家としてのデビュー作と言えるが、ここではキリスト教に対するかなり率直な違和感が示されていた）、労働運動や学生運動を描いたもの（『九老 아리랑（九老アリラン）』、文学と知性社、1987年、『어디서야 서울（オデッセア・ソウル）1・2』、民音社、1993年、などが代表作。作者の視線は＜運動＞に対して決して好意的ではない）、若い日の追憶や故郷の思い出を題材にしたもの（ベストセラー作家としての地位を確立させた『젊은 날의

者・李文烈は、おそらく1980年代以後の韓国で、一番多作で最も多くの読者を得て来た作家である。それだけに作品のテーマも多様で、＜李文烈文学＞の評価は、どの作品を主な対象として論ずるかによって変わらざるを得ないが⁽¹⁾、筆者の見るところでは李文烈を韓国の現代社会に内在する「社会意識」を持つ作家としての位置に置いたのは、そして作家自身が「社会問題」に立ち向かう姿勢を取るように仕向けたのは、共産主義の理論家として朝鮮戦争中に「北」にわたってその後も＜対南工作＞にかかわって来たこととされる、実父の存在であった⁽²⁾。

つまり、作家・李文烈の社会意識の骨格は最も近い肉親が「北」に住む共産主義者であるという事実がもたらした、「反共」という大韓民

肖像（若き日の肖像）』、民音社、1981年、の他にも『그대 다시는 고향에 가지 못하리（あの人は二度と再び故郷には行けないだろう）』、ナナム、1986年、などがある）、プラトニックラブを至高の愛とする主人公の性の苦悩をテーマにした『레테의 恋歌（レーテの恋歌）』（トゥンジ、1983年。80年代から90年代の代表的ロングセラーであった）があるかと思えば（本稿〔上〕で紹介した反フェミニズム小説『選択』の基調はこの延長線上にあるように感じられる）、近年は『三国志』の韓国語版の執筆を続けている。

(2) 『英雄時代』では「南」への脱出企図の実行と同時に殺害されることになっていたが、実在した李文烈の父親は北朝鮮で長く生存しており、作家自身も面会を要請していたのだが、1999年8月に至って死亡が報道されて「離散家族相違」は遂に実現しなかった。

国の国是との葛藤によって形成されたと考えられるのである。大河小説『辺境』も、特に父親の存在を中心テーマとしたものではないが、常に背景にあって登場人物の思考や行動に纏わりついているのが、「北」で生きている父親と主人公の家族との問題であった。

『변경 (辺境)』(文学と知性社、1989年～1998年)は、1989年2月に第1巻の初版が出てから、1998年12月に第12巻の初版が出て完結する迄、約10年の歳月を通して書き継がれた長編小説である⁽³⁾。

慶尚道のある山村出身の一家(母親、長男、長女、次男、次女。次男は作家・李文烈自身がモデルになっていると見られる)の、朝鮮戦争後から1970年代の「維新時代」に至る時期の⁽⁴⁾、いわば<家族史>がテーマとなっていると言えるが、波瀾に満ちた家族生活の変遷そのものよりは、むしろそのような<家族史>の背景をなす時代の韓国における社会的・政治的変動を作家がどのように見ているかを語ることが、より

主要な執筆動機かも知れないという印象を与える。

舞台となる地域は、故郷の山村とその近くの開拓地、ソウルおよび周辺の外郭地帯、それに釜山程度であり、韓国の大河小説にしばしばあるような、中国大陆から朝鮮半島全体、日本を含む東アジア全域(場合によってはアメリカ大陸からハワイ、あるいは極東ロシアまで含んで)を縦横に駆け巡る壮大なスケールを持つ作品ではない⁽⁵⁾。ここにはほぼ1980年代後半以後、韓国もグローバリゼーションの流れに編入されるまでは、(アメリカへの移民や、ベトナム戦争、あるいは「中東人力輸出」など特殊なケースを別にすれば)解放後の大韓民国の人々の行動範囲が朝鮮半島南の「国内」に局限されていたという事実が反映しているとも言えるが、別の見方をすれば、作家・李文烈がその事実を意識的に強調することで、韓国社会の「辺境」性を浮き彫りにするという意図の表われという面もあるのではないかと考えられる。そして筆者の見限り、その意図はかなり成功しているようで

(3)「文学と知性社」から刊行される書物の形をとったものについて見る限り、完成に至る間にかなりの紆余曲折があったようである。すなわち第Ⅰ部「不妊의 세월 (不妊の歳月)」に相当する第1巻～第3巻が1989年2月に同時に刊行され、第Ⅱ部「시드는 大地 (痩せ細る大地)」に相当する第4巻～第6巻のうち、第4巻・第5巻は1992年10月と11月に続けて出された後、第6巻は1994年12月になって刊行される。ところが、この時点で既に刊行済のものについてかなり全面的な改稿があって、後に12巻本として完成した時点では旧第5巻が第7巻に、旧第6巻が第8巻になり、第Ⅲ部「떠도는 자들의 노래 (流れ者たちの唄)」に相当する第9巻～第12巻が1998年12月に一挙に刊行されるという経過を辿って完成している。従って、当初の第1巻～第6巻のうちに第1巻～第8巻に膨らまされて(旧第1巻～第4巻が完成版の第1巻～第6巻になったと見られる)、それに第Ⅲ部の4冊が加えられたことになる。一冊あたりのページ数に大きな変化はないから、約50パーセントも書き加えられた旧第1巻～第

4巻の変化は気になるが、筆者は現在までのところその変化の内容を確認できない(実際に変化の内容を具体的に確認するには、気の遠くなるような膨大な作業が必要になるが、その作業にそれほど重要な意味があるとも考えられない)。ここでは、1994年までに出版された第1巻～第6巻と、1998年の完成版の第7巻～第12巻によって全体の内容を判断することにする。

(4)とはいえ、小説のスタートは1960年の「四月革命」の時期であり、それ以前は登場人物たちの「回想」として描かれている。勿論、「回想」部分が(前述の父親の存在を含めて)、全体のテーマにとって重要な意味を持っている。

(5)朴景利の『土地』の内容などとの関連で本稿でも後で触れるが、朝鮮半島の地政学的位置とも関連して、植民地時代までの朝鮮社会(あるいは当時の朝鮮文学の舞台となっていた地域)は、当時の日本列島社会(あるいは「日本近代文学」の舞台となった地域)と比較しても、多くの場合、遥かに「開かれた空間」に位置していたことに留意したい。

ある。

ここで言う「辺境」性とは、実はこれこそがこの作品全体の主題として題名にもなっているのであるが、プラス・イメージとしての frontier を意味するのではない。作品の中で作者は、「周辺」が中心からの距離に規定された中立的概念であるのに対して、「辺境」は、中心から支配され、自らの意志で動くことのできない地域を指す概念であるということを登場人物に語らせている。そして朝鮮半島は、「北」がソ連という「帝国」の「辺境」であり、「南」がアメリカという「帝国」の「辺境」であるために、自らの運命を自らが決定できない境遇に置かれていると言うのである⁽⁶⁾。

韓国民衆が、如何に「民主主義」や「人権」を叫ぼうとも、自らそれを勝ち取る力はなく、

結局はアメリカという強大国に依存するしかなかったという認識は、腕力の強い少年が暴力支配で級友から金品を奪う小学校のクラスを、担任教師の交替によってはじめて民主化できたという、李箱文学賞大賞を受賞した短編「우리들의 일그러진 영웅（我らが歪んだ英雄）」⁽⁷⁾以来、李文烈がしばしばテーマとして来たところである。

そしてこの場合の李文烈の特徴は、アメリカに支配される現実への怒りを語るのではなく、その現実を認識できないで「民主主義」や「人権」を云々する人々を冷笑するところにあったように思われる。作品『辺境』の内容に即して、この点を具体的に見ておこう。

小説の冒頭は、1960年の「四月革命」に際し

(6) この表現からも明らかな様に、『辺境』における「帝国」概念は、ホブソン＝レーニンの「帝国主義論」におけるそれではなく、むしろ意識的に古典的「帝国主義論」に反発する用語法を用いていたのではないと思われる。しかし、「帝国」概念をよりひろく規定して世界史認識を再構成しようとする近年の学問的潮流（例えば山内昌之・増田一夫・村田雄次郎編『帝国とは何か』、岩波書店、1997年、参照。筆者はこの潮流のもつ implication には賛同できないが、「帝国」概念の広義化自体は正しい問題提起であったと考える。この点についての筆者の見解については拙稿「日本—最後の帝国主義・最初の新興工業国」、浅羽良昌・瀧澤秀樹編著『世界経済の興亡200年』、東洋経済新報社、1999年、所収、を参照）をどの程度意識していたかは不明であるにしても、ある意味では冷戦構造崩壊後の世界に相応しい用語を先取りしていたと言えるかも知れない。なおこの点について若干敷衍すれば、この作品が書き始められた1980年代後半は、変革運動の方向設定と関連して、韓国社会の構造や性格規定を巡って「韓国資本主義論争」（「韓国社会構成体論争」「韓国社会性格論争」とも呼ばれた）が活発に展開していた時期であったことに、注意したい（この論争については、拙稿「“変革の思想”と“思想の変革”——『韓国社会性格論争』に関する日本人—社会科学徒の所感——」および「韓国社会性格論争の枠組」〔何れも拙著『韓国の経済発展と社会構造』、御茶の水書房、1992年、

所収）などを参照）。「韓国資本主義論争」に先立って「従属理論」の輸入期とも言えるべき1980年代前半があったこともあって（その点については取り敢えず拙稿「民族経済論の新たな展開——『韓国資本主義論争』の過程での批判と展開」〔拙著『韓国社会の転換——変革期の民衆世界——』、御茶の水書房、1988年、所収）や「「韓国資本主義論争」と民族経済論」〔前掲拙著『韓国の経済発展と社会構造』所収）などを参照）、韓国社会の（従属理論の言う）「周辺性」如何（あるいは韓国資本主義の「従属性」如何）は当時の論争における主要なテーマのひとつであった。李文烈が『辺境』を構想する際に、この論争をどの程度意識していたかは知る術がないが、この作品において敢えて「周辺」ではなくて「辺境」性を前面に押し出したところには、「辺境」性は資本主義世界市場に規定されるのではなく、いわば生産様式や社会構成体の如何とは関わりなく、「帝国」に支配される地域に一般的に成立するという主張が込められていたと考えられる。そうだとすれば、この作品の主題には、変革運動圏とかかわる「韓国資本主義論争」のパラダイムそのものへの批判と反発が含まれていたのではないだろうか。筆者がこの作品を『英雄時代』に続く「イデオロギー小説」と規定する理由のひとつもここにある。

(7) 『1987李箱文学賞受賞作品集（11）』（文芸思想社、1987年）に収録。

て、学生デモを鎮圧するために権力によって動員されたヤクザ組織の一員であった主人公（作中人物としては家族の次男）が、混乱の渦中で弾圧された学生デモ隊の一員と間違われ、英雄扱いされてしまう場面から始まる。エピソードとしては面白いが、ここには「四月革命」という歴史的イベントに対する積極的な視点は最初から認められない。そしてそれが、この『辺境』という作品全体の基調なのである。いわば作者にとって韓国社会の「辺境」性は、支配者側からにせよ民衆の側からにせよ、現代韓国における歴史形成の主流から見ても「辺境」に位置する人々を敢えて中心に据えることによって、より鮮明に視角化されようとしていると見ることができるかも知れない。

〈家族史〉と言っても、家族全員が一緒に暮らす時期はむしろ例外的で、一人一人がそれぞれ自分なりの個性的な人生を歩む点で、作品は起伏に富んだ物語性を作り出していて、その点が多く読者を得た理由であると思われるが、その中でも中心的役割を果たしているのは、長男・次男・長女の三名である。

長男は勤勉性とヤクザ性を合わせ持ち、かつ女性に対する純粋な愛情と「水商売」関係の女性に対する遊戯の道具視を合わせ持つ、やや複雑な人間性の持ち主として描かれている。その勤勉性の真骨頂は、朴政権時代の初期に「重農政策」の一環として行われた新開墾地開発のための営農資金の貸与を受けて、故郷の村の近くの広大な原野を農地とする必死の努力として示されるが、結局それも失敗に終わってからはテンピラ・ヤクザ集団に加わって詐欺と「ヒモ」の

生活を繰り返す。興味のあるのは、その過程で、ソウル南方の荒蕪地に放擲された都市貧民の一員に加わって、有名な「広州大団地」事件の現場に居合わせることになる場面である。同事件を文学作品として描いたものとしては、すでに李東哲の『아리랑공화국(アリラン共和国)』⁽⁸⁾があるが、当時の土地投機と利権の構造を具体的に知るうえでは『辺境』がはるかに優れている⁽⁹⁾。

ともあれ、長男の場合、〈長男（すなわち父親のいない家庭における家長）〉として他の兄弟と母親に対して持つ一種の義務感とは裏腹に、同時代の韓国青年としてはおそらく例外的であったろうほど不自然に、政治に対して無関心・無自覚である。幼年期をその兄とともに孤児院で過ごした過去を持つ次男（事実上の主人公。前述したように作者・李文烈自身がモデルになっていると見られる）は、その点で長男とは対照的である。

次男は、ある意味では長男とは対照的なほど、ナイーブで感受性に富んだ人物として設定されている。幼年期にある少女に憧れて以来、何度かの女性遍歴は経験するが、女性を玩具のように見る姿勢はなく、むしろ異性との愛情と本人の社会的位置や社会意識の間の矛盾や葛藤に真剣に苦悩する「悩める青年」である。（日本で言う）高級公務員試験に合格して、社会的に出世することで家族全員の生活を安定させることを義務として自分に課して、住み込み家庭教師その他のアルバイトで学資と生活費を稼ぎながら懸命な努力を続けるが、結局合格して入学した大学での専攻が到底志向に合わないことに絶

(8) 東光出版社、1985年。

(9) 他の家族と離れて暮らしていた長女が、同じ地域で土地投機の当事者になるという内容になっていることは、フィクションにしても「出来過ぎた」印象を与え

ないではないが、70年代初頭の都市貧民問題とソウル市近郊での土地投機の実態を描くという限りでは、作品にリアリティーを与えている。

望して退学し、文学の道を選択するに至る。

〈北〉にいる父親の影が常に見え隠れするの
が、この次男の場合である。受験勉強に集中する
目的（もう一つはあたかもベアトリーチェの
ように憧れるかつての少女とのあり得るかも知
れない再会の期待）で釜山で家族と離れた生活
をしていたとき、古本屋で偶然入手したマルク
ス主義の書籍（日本語訳）のために、ずっと後
になって「南派間諜」の疑いを受けて取り調べ
られるのも、結局は情報当局が父親の存在を把
握しているからである。アメリカという「帝国」
の「辺境」にあって反共を国是とする南の地で
は、彼にはそもそも一般的な意味での自由は存
在し得ないのである⁽¹⁰⁾。

苦学生としての彼の成長過程は、「四月革命」
「5.16軍事クーデター」「韓日条約反対闘争」
「三選改憲反対闘争」「維新体制」へと続く韓国
現代史の激動期であり、特に学生街においては
殆ど常に〈政治の季節〉であった。主人公の周
辺もまた、その激動の嵐の中に巻き込まれ、多
くの友人たちが英雄的闘士になったり犠牲者にな
ったりして行く。しかし、主人公自身はここ
でも常に「辺境」にあって、そうした社会現象
を「辺境」の論理で解釈しつつ、結局は歴史の
現状打開に身を持ってぶつかろうとする人々

（反体制運動家だけではなく、新聞記者や若手
文学者などの知識人などを含めて）を冷淡な眼
で批評する姿勢に終始するのである⁽¹¹⁾。その批
評が当時の運動の持った弱点をそれなりに適確
に衝いている面はあり、何よりも作家の卓越し
た表現力の効果もあって、読者は自然に当時の
運動に対して冷ややかな見方に導かれて行くで
あろう。この意味で、『辺境』はイデオロギー
文学として確かに成功作であると言ってよい。

もう一人の主要登場人物としての長女の人生
も紆余曲折に満ちたものであった。家計を助け
るために、ソウル市内の零細機械工場で働いた
後、あまりに非人間的な労働条件と労働環境に
耐えられずに逃げ出して、美容師の補助を勤め
ながら遂に正式の美容師の資格を得て、ソウル
の外郭地帯で小さな美容院を経営するに至る。
この段階までは家族との交流もあり、弟である
次男の学資を援助したりもしていたのだが、結
局その美容院も詐欺まがいの手法で友人に奪わ
れ、「水商売」の世界でホステスの暮らしを始め
る。そこで常連客となった男（ソウル近郊の
農家の息子で、働く意欲に欠けた魅力のない男
であるが、当時「近郊農家」は潜在的な「土地
成金」と同義語であった）との擬似恋愛の末に
偽装自殺未遂事件を演出して、結婚する。結婚

(10)『辺境』においては明示的には語られていないが、
ソ連という「帝国」の「辺境」に住む父親も、共産主
義というイデオロギーの枠から抜け出せないという点
では似たような境遇にあると考えているようである
（『英雄時代』の父親像ではその点が極めて明瞭であ
った）。なお、この作品（および管見の限り李文烈のイ
デオロギー文学のほぼ全て）において、「反共」と言
う時の共産主義はマルクス・レーニン・スターリンま
たはヨーロッパの共産主義思想家の思想やソ連の国家
体制を指しており、金日成の「主体思想」への直接の
言及が見られないことにも注目される。李文烈が「主
体思想」にいささかでも好意的であったとは考えられ
ないから、その理由は慎重に考察されなくてはならな
いが、〈北〉もまた「辺境」であるという認識を際立

たせる必要がしからしめたものかも知れない。

(11)主人公の「辺境」論が確立するのは、激しい学生運
動を批判的に論評する（兄の友人であった）ある大新
聞の新聞記者との対話を通してであったことになって
いる。しかし、その新聞記者の場合は自ら運動に身を
挺した体験に裏付けられた意見を開陳するのであり、
主人公のような傍観者の立場から得た認識を語るの
ではない。李文烈の作品から窺われるのは、作家自身
は実際には〈運動〉にかなり近いところに身を置いた
ことがあるのではないかということであるが、もし〈運
動〉を通して得た「辺境」論を展開していたならば、
それはそれなりにリアリティーを持つことができたの
ではなかろうか。

を契機に、過去を隠すために生家の家族との関係を一切絶つ。その後は、夫の両親の信頼を得るための努力を重ねたうえで、次々に農地の換金に成功し、不動産投機に走る「福夫人」⁽¹²⁾として名を売るにまで至って、遂には「広州大団地事件」ではお互いに知らないまま、母親を含む他の家族全員と反対の立場で行動するのである。

作家はこの長女の経済活動を「賤民資本主義」と表現しているが、文学作品にマックス・ヴェーバーの用語がいきなり登場するのには驚かされるし、作家の社会科学に関する知識も中途半端なものではないことを窺わせる。

以上の三名に比べると、母親と末娘の存在はいわば「脇役」的である。家計を維持するために、バラック小屋に住みながらの内職や、住み込み家政婦⁽¹³⁾の暮らしを続ける母親の苦労は実感を持って伝わって来るが、『英雄時代』の母親の見せた豪胆な生き方は、この作品では描かれていない。朝鮮戦争の戦中・戦後の時期と、60年代以後の韓国社会の変化（あるいは実在の母親の年齢による変化）が、反映しているのかも知れない。

以上で紹介してきた『辺境』という近現代史を背景にした李文烈の大河歴史小説は、確かに現代韓国社会の実相をリアルに描いている面が

あることは間違いないし、筆者のように韓国社会の外側からその内部のあり方を研究しようとしている者にとって、豊富な情報を提供してくれる貴重な作品であると言える。

とはいえ、この作品が全体として語ろうとしていることの中身と言うか、それが持つ思想性について言えば、筆者としては深い疑問を抱かざるを得ない。およそ「文学の社会的意味」を問うなどとはナンセンスで、「文学は文学作品それ自体が持つ価値以外の評価基準を拒否する」という立場からすれば、筆者の感じる疑問などはそもそも無意味であろう。しかし（文学専門家ではない）筆者としては、飽くまでも「文学の社会性」を問うことに固執したいし、何よりも李文烈という作家自身が常にそのことを強調しているのである⁽¹⁴⁾。

一言でいえば、眼前に展開する社会事象に対して、あるいは自らの人生それ自体に対してさえ、李文烈という作家は、観照的ではなくて極端に言えば冷笑的なのではないだろうか。読者の多くを社会から眼をそらさせるという文学至上主義では決してなく、社会事象を正面から見る視線を敢えて冷笑することで、歴史形成の、自らの人生形成の主体としての意識を霧散させ、社会と人生に対する冷笑と虚無意識を拡散させる結果を、むしろ意識的に追求しているのではないかという疑いである。韓国現代文学が築い

(12)韓国では、家庭夫人でありながら私債の運用や不動産投機などのマネーゲームに走る人を「福夫人」と呼ぶ。「福夫人」の語源は不明であるが、小規模な不動産仲介業を「福德房」と呼ぶことと、関係があるかも知れない。いずれにせよ、「福夫人」の存在自体、極めて現代韓国社会的現象であると言ってよいと思われる。

(13)1970年代まで韓国の比較的余裕のある家庭に一般的であった住み込み家政婦（「食母」[シンモ]と呼ばれた）は、社会的には身分的に低い階層の人々と見られていた。なお、この作品の中には、主人公が大学の同

級生であるガールフレンドの家に誘われて遊びに行った場で、その家の家政婦として働いていた母親に偶然出合ったため激しい侮辱感を持って女子学生との関係を絶つという場面があるが、その出会いも侮辱感もあまりに「出来過ぎ」という印象を与える。

(14)「日韓文学者会議」などの場で、李文烈はしばしば社会意識を放棄した日本文学を批判していると伝えられる。彼自身の人生観や世界観を語った文章を集めた李文烈『思索』（サルリム、1991年）からも、そうした文学観の一端を知ることができる。

て来た大河歴史小説の輝かしい伝統の中で、その最新作とも言える『辺境』の持つ特異性は、まさにここにあると考える。

V. 「歴史としての現代」と「現代を 遡及させた歴史」

——『土地』と『혼불（魂の火）』——

日帝植民地時代のある家族の歴史を描いたという点で、対象とする時代は全くことなるが、筆者の見るところでは上の『辺境』とは対照的な社会意識の裏付けを持った、二つの大河歴史小説についてここでその歴史認識の特徴を見ておきたい。韓国現代文学の金字塔とも評される朴景利の『土地』と、多分に『土地』を意識して書かれたように見える崔明姫の『혼불（魂の火）』である。

朴景利の『土地』は1969年に雑誌『現代文学』に連載する形で執筆が開始され、1973年に第1巻が刊行された後⁽¹⁵⁾、何度かの中断の危機を乗り越えて⁽¹⁶⁾、26年間かかって1994年8月15日の光復節（韓国の独立記念日）に全16巻を完成さ

せた⁽¹⁷⁾、文字通りの大河長編小説である。

書物として刊行された形での『土地』の特徴は、各巻末に主要登場人物の系図、周辺の人々の人間関係の簡潔な図解、舞台となった地域の地図や家屋の配置図が付けられていて、大河小説を読む時にしばしば体験する登場人物についての記憶の困難さを大幅に解消していることである。おそらく作者自身も長期の執筆期間にわたって、それらの自作メモを座右にして、作品の一貫性をまもろうと注意したものと思われる。物語が1894年の東学革命直後からスタートするだけに、今日使われていない当時の人々の言葉や、主として慶尚道地方の方言や日本語、中国語などについての意味の説明（어휘 풀이）が各巻ごとに数ページも付けられていることも、登場人物の話し言葉を無理に現代語訳しないで時代と地域の雰囲気を活かしつつ、なおかつ読者の理解を容易にしようとする作者の配慮のあらわれであろう⁽¹⁸⁾。

物語は、慶尚南道の西南で智異山のちょうど真南に位置して南海（朝鮮半島南部の多島海）に面する河東邑⁽¹⁹⁾からやや北の平沙里という集落の、崔参判宅⁽²⁰⁾という旧くからの両班の家門

(15)第1巻刊行以前の1971年に作者自身が癌の手術で執筆を中断するなど、当初から苦難の連続の中での執筆活動であった。

(16)1974年4月には娘婿の金芝河が「民青学連事件」で逮捕され、一時釈放された後も1970年代を通して度重なる獄中生活を繰り返し、遂には「反共法」違反で死刑判決を受けるという苦難の歳月を送ったことは、広く知られている。著名な作家である朴景利が義理の母であったことが、陰に陽に金芝河救命に力になったと言われるが、その「維新時代」にこの作品が書き続けられたことは実に驚嘆に値する。その後も、1989年秋から3年間の中断期間があった。

(17)前註の1989年秋からの中断ののち、第5部を完成させた1993年6月に既刊分を全て新版に改めて、1994年にその新版に連続させる形で全16巻の完結を見た。筆者が所有しているのは、新版の全16巻（ソル、1993年～1994年）である。

(18)但し、日本語の説明については、時々誤まりが散見される。本稿執筆にあたってその「正誤表」を作成することも考えてみたが、煩雑でもあり、瑣末な誤りが作品全体の価値を低めているとも思えないので、その作業は行わなかった。ただ、「呉服店」が「洋装店」と説明されているなど、“あの朴景利氏にして!”と感ぜられる単純なミスがあったことから、「日韓文化交流」は映画や歌謡曲の解禁というレベルではなく、より深いところで本格的に進められるべきであることを痛感させたのも事実である。

(19)大阪外国語大学朝鮮語研究室編『朝鮮語大辞典』（角川書店、1986年）は、河東邑について次のように説明している。「慶尚南道の郡庁所在地の邑。郡の西部の蟾津江河口から約30キロメートル上流の東岸に位置し、全羅南道各地との陸路および蟾津江水運の要地で、郡内の農産物・水産物の集散地」。

(20)「参判」は李朝時代の従二品の官職のひとつ。従っ

の没落と、その家門を継いだ西姫という女性によるその再興という筋を軸にして、李朝時代以来の伝統的な身分関係と日本による植民地支配が縦横に張り巡らされたなかでの複雑な生活史・家族史として展開する。主人公は、やや複雑な過程でその家門の正統な後継者となりながら、家門の傍系に属する（従って家門の正統性から見れば下の身分と言える）男の策略で奪われた地位と財産を取り戻すために、旧「満州」（中国東北地方）の龍井⁽²¹⁾に移住したあと卓越した商才を発揮して巨萬の富を蓄積し、奪われた地位を回復する⁽²²⁾崔西姫という言葉が美貌の女丈夫である（勿論、「女丈夫」という形容に相応しくない、繊細でかつ激しい心情の持ち主である）。

地方の「在郷両班」の家門を受け継いだ個性のある女性を主人公として、その家門と地域の

人々の生活史を繊細な表現で、しかし豪胆な内容を込めて描くことで、日帝植民地時代の朝鮮社会における社会変動を内側から照射したという点で、『土地』と共通のモチーフを持つ大河歴史小説として、比較的最近になって完成された形で読者に提供され⁽²³⁾、読書界で大きな話題になったのが崔明姫の『혼불（魂の火）』である。

1947年生まれ、1926年生まれの朴景利よりも21歳も年少であり、日帝時代の社会的雰囲気を経験しつつ青年期を迎えた後者に比べ、自ら肌で接したことのない時代と社会を「学習」のなかで再構成したという点で、作品の成り立ちをそもそも異にしている作品であるが、作者が敢えてその「学習」に挑戦して『土地』とかなり共通の風土の上に『魂の火』という大河歴史小説を書こうとした動機は、そもそもどのようなところにあったのであろうか⁽²⁴⁾。

「参判宅」とは、かつてその官職を得たことのある両班の家門の通称で、その地域においては固有名詞のように使われる。

(21)旧「満州」地方のうちのほぼ現在の吉林省の地域は「間島」と呼ばれ、日本の中国大陸侵略の拠点であると同時に、中国民衆と朝鮮民衆による抗日闘争の主な舞台でもあり、そのなかでも、詩人尹東柱の故郷で歌曲「先駆者」にも登場する龍井は、日帝植民地時代の朝鮮民衆と、「満州国」（現在中国では「偽満州」と呼ばれている）以前から中国民衆にとって、抗日武装闘争を象徴するような地名であった。

(22)但し、その目的を達成した後は、故郷の家はそのまま保存して、自らは主として晋州で暮らす。晋州は「壬辰倭乱」（日本で「文禄・慶長の役」と呼ぶ豊臣秀吉による朝鮮侵略戦争）で激戦地となったことから、やはり抗日を象徴する地名のひとつであるから、作者は主人公を龍井から晋州に移動させて植民地支配に反発するその意識を表わそうとしたのかも知れない。しかし、作中人物としての主人公は、当然「反日」意識を秘めながらも、夫や息子達、実家の叔父など自らの家族・親戚を護るためには日本の支配に協力する「親日」行為も厭わないところからみて、作者の意図は、むしろ主人公の行動は単なる伝統的支配階層としての両班のなかでも名門であった「参判宅」の回復自体を

目的とするものではなく、人間的<不義>と闘うという動機を基本にしていたことを、晋州に居住させることで語ろうとしていたのではないかと推察させる。

(23)『魂の火』も、完成版が刊行される迄に、かなりの紆余曲折を経験している。最初は1981年の東亜日報創刊60周年記念の「2000万ウォン稿料長編小説」公募に応募した『魂の火』が当選し、それを第1部として『東亜日報』に連載した後、第2～5部を7年余の間月刊誌『新東亜』に連載し、それをさらに満一年かけて補完執筆をしたとされる。書物としては1990年にハンギル社から第1～2部が刊行され、6年後の1996年に5部10巻として完成されたものがあらためてハンギル社から刊行されるという経過を辿っている。大きな反響を呼んだのは完成版の刊行以後のことで、筆者の所有するものも1996年の完成版である。なお、崔明姫は完成版刊行後ほどなく渡米してニューヨーク州立大学で講演するなど、国際舞台にもデビューするが、1998年に50代初めの若さで急逝した。直接の死因は別にして、文学関係者たちの間では「『魂の火』の完成に心血を注いだ結果、すべての体力を使い尽くして逝去した」と論評された。

(24)『土地』と『魂の火』の執筆および発表時期を対照すると、『土地』の執筆がほぼ50%程度すすんだ時点で、『魂の火』の執筆が開始されている。作者自身が

『魂の火』のストーリーは日中全面戦争としての「日支事変」の始まる、植民地支配も比較的後期の総動員体制が近づく時期にスタートして⁽²⁵⁾、解放前夜まで続くが、主な舞台となっているのは全羅北道の南端で全羅南道との境界近くの南原郡所在の梅岸という邑と、その周辺の農村・山村である⁽²⁶⁾。興味のあるのは、そこから東の方向の近くに智異山があり、『土地』の平沙里とは直線距離でほど近くの、智異山の両脇に位置していることである⁽²⁷⁾。筆者が、作者の崔明姫が『土地』を強く意識していたのではないかと考えるひとつの理由も、このような主舞台の設定と関わっている。

極めて近い地理的位置にもかかわらず、『土地』の舞台は慶尚道であり、『魂の火』は全羅道であることに注目したい。多くの批評家が既に指摘しているように、『魂の火』の持つ文学的価値の最も大きな点は、その言語表現の豊かさと、その言語を以って語られる伝統的な民俗

的価値への飽くことのない執着にある⁽²⁸⁾。全羅道のなかでも、伝統文化の中心地のひとつとされ、パンソリの名作『春香伝』の舞台でもあった南原近くの農村が主舞台として設定されたことも、おそらくこのことと無関係ではないであろう。

今日の韓国社会の宿痾の如く言われる「慶尚道と全羅道の地域間対立」において、崔明姫が全羅道の側に立っているという次元での問題では決してない。民族の意識は根底において民俗文化に根をおろしてこそ意味があり、その民俗文化の正統性は、古代の百済から近代の全羅道に至る地域にこそ脈々と流れていると、作者は考えているのではないだろうか。古代史に遡及して新羅との戦いにおける百済の正当性を述べるのも、小説の冒頭で主人公の婚約から結婚に至る儀礼を微に入り細にわたって描写するのも、同じ文脈で理解することができる⁽²⁹⁾。植民地時代を描きながら独立闘争を主なテーマと

そのことについて語る機会があったか否かについて筆者の知るところではないが、内容から見て、既に高い評価が定まっていた『土地』を強く意識して筆を執ったことは、殆ど間違いない。なお、当時は丁度長年の朴正熙政権が崩壊して「ソウルの春」と言われた時期であったが、特にそのような政治の状況が執筆動機の背景にあったということはないように思われる。常に「金芝河の義母」であることを意識せざるを得なかった朴景利とは違い、崔明姫の場合は政治状況からは比較的自由な立場にあったのではないだろうか。

(25) 勿論、この作品の場合も登場人物による回想の形で、それ以前に遡る場面は多いし、作家自身が古代史にまで及ぶ朝鮮民族についての独特の歴史観を述べる部分がかなりの比重を占めているのも、特徴のひとつである。

(26) 「梅岸」は『朝鮮語大辞典』に登場しない。韓国のハングル学会（한글학회）編『한국명어큰사전（韓国地名大辞典）』（1991年）によると、全羅北道だけで「매안」という集落が2箇所あり、何れも南原邑近くの邑（마을）の名称となっている。当時の行政的位置は知ることができないが、1999年版の韓国行政文化院『韓国行政区域総覧』で見ると南原市（かつての南原郡全域を含む）には「매안」の地名がないから、

現在は行政区域ではなく単なる集落名となっているものと思われる。

(27) とはいえ、ふたつの作品における「智異山」の意味は全く異なる。『土地』では智異山は東学農民軍の残党の集結した場所であり、日帝植民地時代を通して武装独立闘争の根拠地であり、主人公の夫を含めて多くの作中人物が関係を持つ山であるが、『魂の火』では、舞台の背景のひとつをなす険しい山であるにすぎない。もともと『魂の火』では、植民地権力の苛烈な収奪と民衆抑圧は描かれても、独立闘争自体は主要な関心事ではないかのである。『土地』を意識しつつ、『魂の火』を敢えてそのような内容のものにしたのではないというのが、筆者の見方である。

(28) もっともこの点は、その民俗文化の伝統と言語による表現方法を共有していない筆者のような読者にとって、作品の内容理解をおそろしく困難にしている。筆者にとって例えば『辺境』に比べて『土地』の韓国語は遥かに難解であったが、『魂の火』はその数倍も難解であった。読解力不足のための誤読や誤解、錯覚のあり得ることを、ことわっておきたい。

(29) このように言うからといって、作者が伝統社会を一義的に美化する復古主義者であるとか、自民族だけの優越性を主張する排他的民族主義者であるというので

していないことも、作者における民族の把握が「他民族との対立における」それではなく、民俗性に基礎を置く独自の民族性を指向するところに由来するであろう。

以上の記述は、『土地』と『魂の火』を対比して、民族史に対する後者の理解の深さを強調しようとしているという印象を与えたかもしれないが、それは筆者の本意ではない。日帝植民地支配の現実が朝鮮社会をどのように変質させ、植民地の人々がそのなかでどのように生きてきたのかをリアルに描写している点で、そして複雑で多様な性格を持つ登場人物たちの織り成す人間模様を構成している点で、『土地』は『魂の火』よりも遥かに高い水準にあるし、そもそもこれほど性格の異なったふたつの作品を同じ次元で対比、批評することからして無謀な企てであろう。

ここでは以上のような相違にもかかわらず、ふたつの作品が共有しているように見える歴史認識について触れることで、韓国現代文学において大河歴史小説の持つ意味を、あらためて考えてみたい。

まず、作品の言わば本拠地とも言える、『土地』の慶尚南道河東郡平沙里と『魂の火』の全羅北道南原郡梅岸周辺地域の自然地理的条件と

歴史的・社会的特性の把握に、両作品ともに徹底的なこだわりを見せていること、そしてそれにもかかわらず小説の舞台は朝鮮半島全体から日本、中国東北地方や場合によっては極東ロシアまで地域的広がりを持ってストーリーが展開するという点である。

「本拠地」の細部の事情へのこだわりという点は、「麗水・順天反乱事件」以後の南部パルチザンの活動を描いた趙廷来の『太白山脈』における全羅南道筏橋、朝鮮戦争勃発直前から戦争前期を描いた金源日の『火の祭典』における慶尚南道進宮などの場合⁽³⁰⁾と共通しており、何れも作品にリアリティーを保障する重要な根拠となっているが、『土地』『魂の火』の場合には、あるひとつの在郷兩班の家門の歴史と不可分な土地である点で、物語性を成立させるうえでより重要な意味を占めていると言えよう。

小説の舞台の地域的広がりという点は、もともと解放前の朝鮮社会の持っていた（ある意味での）対外的開放性に根拠を置いているので、自然であるとも言えるが⁽³¹⁾、日本帝国主義の支配下にある旧「満州」社会の社会的雰囲気、特に中国人（中でも漢族・モンゴル族・満州族などの相違がある）と朝鮮人と日本人の間にある民族的葛藤の描写において、さらには日本の支配に協力する人々と抵抗する人々と動揺する人々、諦観する人々の生き方を描く点で、

ゝはない。古代史に関連して言えば、作者は高句麗の遺臣の建てた渤海の歴史にも深い関心を示して、渤海滅亡史を悲しみを込めて描いているが、「渤海は韓民族の国家であった」という（今日の韓国でむしろ支配的な）偏狭な見方を明確に否定している。伝統的民俗文化と伝統的身分制度の関連も意識的に扱われており、（結局は悲惨な結末を迎えるが）身分を超越した男女の言わば「禁断の恋」も、人間性讃歌として描かれている。全羅道を主舞台に設定したからといって、慶尚道に対する敵対感情の類も全く見られないのも勿論である。

(30)『太白山脈』『火の祭典』については本稿（上）参照。

(31)とはいえ、逆に解放後になると日本は別にして中国大陸は韓国にとって「禁断の地」となり、1992年の「韓中国交回復」前のほぼ1980年代末頃から韓国人の吉林省延辺朝鮮族自治州訪問が始まるまで、現地取材は極めて困難であったであろうと思われる。『土地』と『魂の火』に登場する間島地方（旧「満州」）の描写は、現地踏査を経ないで日帝時代の資料をもとに執筆されたと考えられるが、そのためだけでもどれほど多くの努力を必要としたかは、想像に難くない。

『土地』と『魂の火』は何れも、例えば同時代の作家である李光洙の作品と比較してもはるかに鋭い視点を持っている。

しばしば李光洙文学の最高傑作とされる『喜(土)』(1932年～1933年に執筆)⁽³²⁾の場合、日帝時代末期の朝鮮版ナロードニキ運動とも言うべき新農村運動に心血を注ぐ主人公が、北の方向に進む軍隊を見て「愛国」の思いに打たれる場面があるが、その軍隊とは「満州」の奉天(現在の瀋陽)に向かう日本軍なのである。李光洙が何時から「親日派」になったのかという議論はともかく、彼の念頭には東洋の先進国日本が遅れたアジアを啓蒙することを当然視するような発想が相当初期から根を下ろしていたと考えられ⁽³³⁾、歴史の展開を受動的を追いかける過程で、いわば「自然に」親日性向を強めていったのではなかったであろうか。そのような李光洙の眼には、日本を前にしながら相互の葛藤に苦しむアジアの民衆の姿は見えなかったであろうし、まして「アジア民衆の連帯」のような発想は、思いも及ばなかったであろう。

彼の比較的後期の作品『有情』(1933年)⁽³⁴⁾では舞台は中国東北地方を超えて雪深いシベリアの森林地帯に及ぶし、『사랑(愛)』(1938年・1950年)⁽³⁵⁾は、女主人公の愛情遍歴が、間島の朝鮮人院長(かつての片思いの対象)の経営する病院での看護婦生活に男女の愛情を超えた人間愛を見出して、心の平安を取り戻す結末になっている。いずれにせよ、李光洙においては旧「満州」もシベリアも、留学生生活を送った日

本も、格別の文化的異質性を持つ社会ではないし、民族的葛藤の場でもない。きわめて予定調和的に主人公たちを受け容れる社会で、そこを舞台上に男女の愛情物語が展開するのである。

『土地』の場合、女主人公の息子のうち徴用を逃れる目的で東京に留学させた長男にとっての日本も、姪のもと恋人で妓生遊びの末に身を持ち崩して「満州」をさ迷う教師上がりの男や、社会通念上では許されない身分で両班の家門の後継者と結婚した後、間島と極東ロシアを結ぶ秘密結社をつくって独立闘争にかかわる主人公の夫にとっての「満州」も、根拠地から離れた孤独の闘いを強いる異質の地である。『魂の火』の場合、公金の使い込みで公職を追われた主人公の息子が、日本式料亭の酌婦「おゆき」(実は朝鮮人女性)を伴って移り住む新京(現在の長春)も、朝鮮人にとっての異国であり、その異国でいかに生きていくかが問題となる地である。李光洙においては葛藤なく入り込める異国が、『土地』と『魂の火』では、生活自体が闘いの場であった。

この時代の朝鮮にとっての空間的広がり、(在米コリアンの場合は性格がやや異なるが)今日の「世界のコリアン」を形成して来たことを考えると、朴景利と崔明姫が描いた世界こそが「歴史としての現代」につながり、したがって「現代を遡及させた歴史」の描写であったことが理解できると思われる。

(32)筆者が所有しているのは1995年に恵園出版社から刊行された版。本稿はこの版に依拠している。

(33)「親日派」に転向する以前の『民族改造論』(1922年。ここでは1981年の又新社版に依拠している)が既にそうした指向性を持つものであったことについては、広く共通の認識が成立しているが、筆者の見るところでは、「三・一独立運動」の遙か以前の1910年に執筆さ

れた彼の初期作品の代表作『無情』(ここでは1992年の文学思想社版に依拠している)に、はやくも文体まで武者小路実篤を真似た日本憧憬が表われていた。

(34)筆者の所有しているのは、1984年の又新社版。

(35)博文書館から1938年に上巻が、1950年に下巻が刊行される。筆者の所有しているのは、1979年に又新社から刊行された<定本 決定版>である。

VI. むすび

現代韓国における大河歴史小説の特徴を、ここで紹介した『辺境』『土地』『魂の火』の三作品が代表して示していると考えたのではないことは、本稿（上）で述べた通りである。しかし、最近年の韓国文学があたかも＜女流文学の時代＞を迎えているかのような観があり、そして『土地』『魂の火』の作家がいずれも（世代はちがうが）「先輩女流作家」であったことを見れば、両者の間に何らかの関連があるのではないかと考えて見るのも、無意味ではないであろう。

ここで筆者は、今日の若手女流作家の多くが1980年代の「嵐のような変革運動の時代」を体験していて、当時の運動を批判的に（決して「清算的に」ではない！）回想しながら、今日の作家活動を展開していることを、あらためて想起したい。1980年代の運動の熱気はすくなくとも表面からは消えた。しかしそれは明らかに、作家たちの意識の底に流れる水脈となって、今日の文学作品に水と栄養を供給している⁽³⁶⁾。

朴景利の『土地』も、崔明姫の『魂の火』も、ともに日帝植民地時代を描きながら、民族独立闘争や民衆運動それ自体を描いた作品ではなかった。しかし、民族と民衆の現実を細部にわたっ

て描ききることが、真の意味で「民族文学」を創造する道であるという確信（勿論この場合「民族文学」は別のより妥当な用語に置き換えられてもよい）を、二人の作家は共有していたのではないだろうか。そして当人たちがどの程度自覚的であるかは別にして、今日の若い世代の作家たちは、その意味での「民族文学」の伝統を二人の先輩巨匠から受け継いで、自らが形成してきた新しい水脈に合流させていると見ることはできないだろうか。

本稿は、韓国文学についての批評ではない。筆者はもともとそのような批評力の持ち主でもない。1970年代の末に「韓国学」に入門した筆者は、朴玄埰教授らの「民族経済」論に、姜萬吉教授らの「民族史学」論に、白樂晴教授らの「民族文学」論に学びながら、韓国の民族主義について考えて来た。しかし冷戦構造崩壊後の世界の現実とは、従来の人文社会科学のパラダイムに根本的な反省を迫っている。その混迷した認識と苦悶の中で、最近になってようやく、筆者なりに新しい学問体系の曙光を見る思いに至っている。本稿は「民族文学」の分野にかかわるその曙光を記そうとした、拙い習作であるに過ぎない。

（1999年9月23日、稿了）

(36)一例だけ挙げれば、主題把握が困難な作品のように見られる申京淑の最新作『기차는 7시에 떠나네』（汽車は7時に出るのね）（文学と知性社、1999年）においては、記憶喪失の主人公（語り手）が過去を取り戻

す劇的な場面において、「運動」との再会が果される。確かに極めて個性的で独特のレトリックを用いる申京淑の文学であるが、それを「文体論」だけで批評するような評論は疑問である。